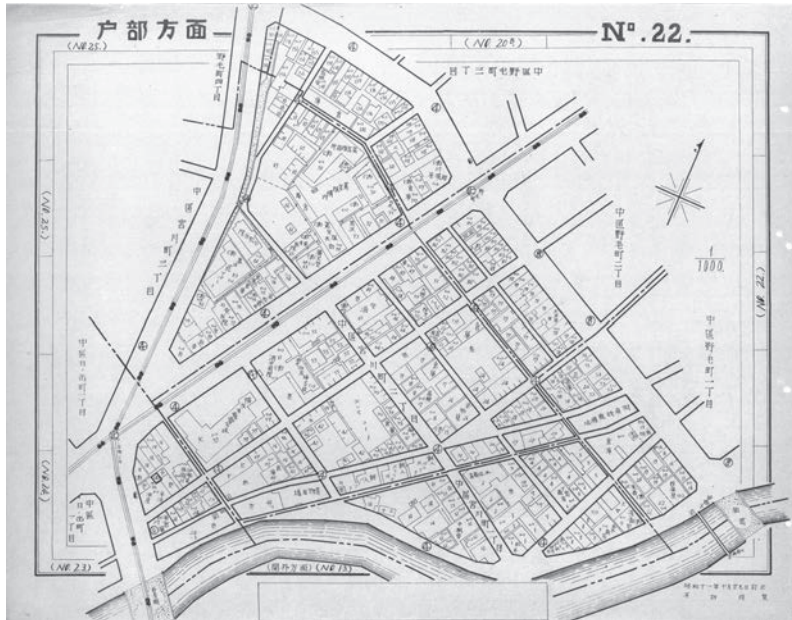


# 市史通信

## 【目次】

- 昭和初期、中区火災保険図Ⅱ  
～野毛山周辺の紹介～
- 一九三〇年代県立横浜第一  
高等女学校の卒業生と同窓生
- 大正・昭和はじめの地図の旅  
～安室吉弥家資料より～
- 所蔵資料紹介  
『昭和の中村』第六号
- 市史資料室たより



「中区火災保険図 戸部方面No.22」1936年10月29日訂正  
野毛町・宮川町付近。図下部の左右に走る2本の道路に挟まれた帯状の地域は鉄道用地として確保されていた。

## 第51号

【発行日】2024年11月29日  
【編集・発行】横浜市史資料室  
〒220-0032  
横浜市西区老松町1番地  
横浜市中央図書館・地下1階  
【電話】045-251-3260  
【FAX】045-251-7321  
【E-mail】  
sisiriyu@ml.city.yokohama.jp  
【ホームページ】  
<https://www.city.yokohama.lg.jp/city-info/yokohamashi/gaiyo/shishiryu/>

表1 「中区火災保険図」 戸部方面年別一覧

図番号	1930年	1932年	1935年	1936年	図番号	1930年	1932年	1935年	1936年
No.1	○		○		No.20A	○			○
No.2	○		○		No.20B	○	○		○
No.3	○		○		No.21	○			○
No.4	○		○		No.22	○			○
No.5	○		○		No.23	○	○		○
No.6	○		○		No.24	○		○	○
No.7	○		○		No.25	○		○	○
No.8	○	○	○		No.26	○		○	○
No.9	○		○		No.27	○		○	○
No.10A	○	○	○		No.28	○		○	○
No.10B	○		○		No.29	○		○	○
No.11	○		○		No.30	○		○	○
No.12A	○		○		No.31	○		○	○
No.12B	○		○		No.32	○		○	○
No.13	○		○		No.33	○		○	○
No.14	○		○		No.34	○		○	○
No.15	○	○	○		No.35	○	○		○
No.16	○		○		追加A	○		○	○
No.17	○		○		追加B	○		○	○
No.18	○		○		追加C	○		○	○
No.19	○		○		追加D	○		○	○

昭和初期、中区火災  
保険図Ⅱ  
～野毛山周辺の紹介～

市史資料室所蔵「中区火災保険図」は、既に本誌第一八号「昭和初期、中区火災保険図」で概要を紹介するとともに、関内地区について一九三〇（昭和五）年図を集成し耐火建物を概観した。

ここでは同様に一九三〇年の野毛山周辺図を集成し概観していく。野毛山周辺が含まれる「戸部方面」は表1にあるように、一九三〇（昭和五）年作製分には欠がなく、全域をカバーできる。このうち「野毛山周辺」として便宜



図1 「堤防」記号の例  
注：「中区火災保険図」 戸部方面  
No.26、1930年。

的にNo.11～35（12と20はA・Bがある）、追加A～Cの三〇枚を集成した。これは、大岡川と現在のJR線を境とし、「戸部方面」から現在の西区役所周辺を除いた地域である（それぞれの番号の範囲は本誌第一八号の図5を参照）。

なお一九三二（昭和七）年図は「再調」と書かれたものがほとんどで、枠外に「横浜新興地図協会」とある。この地域では三一年の京急開通が大きな変化で、8、10A、14、15、23、35に三二年図がある。一方で16、24、25は京急が通っていないが三二年図がなく、京急線が通っている。一九三五年・三六年図は、三五年七月の町界町名字界字名変更への対応であった。

この「野毛山周辺」は、大岡川沿いと現在は埋め立てられている桜川沿いの平地と野毛山や掃部山等の丘陵地から構成されている。

丘陵地には、官舎をはじめとする多くの家屋のほか、野毛山公園や掃部山公園などの公園が配置されている。火災



図2 「中区火災保険図」野毛山周辺集成図、1930年

注:耐火建造物（コンクリート造・土蔵）、準耐火建造物を示した。

保険図を見ると、「▲」が連なったような「凡例」の堤防記号が各所に使われており、この記号によって土手を表している。凡例には「普通凡例」・「特別凡例」があり、通常の地図記号などは普通凡例に含まれ、堤防記号Ⅱ土手記号も普通凡例に含まれている。後述の「直立断涯」記号は火災保険図特有の「特別凡例」（第一八号に掲載）に含まれている。「堤防」記号は、例えば、現在の野毛山動物園の西側、西戸部町一丁目辺りに使われており（図1）、段状に家々が並んでいることがわかる。また「直立断涯」の箇所もあり、同図では右下の土手に接続する地番七九四辺りに「直立断涯」記号と「2K」と書かれたところがあり、石垣やコンクリート造の擁壁と思われる。「野毛山周辺」地域には、このような丘陵地がかなりの割合を占めている。

平地は前述のように大岡川と桜川沿いに带状に広がる地域である。両川沿いともに震災以前から道路が通るが、大岡川沿いは震災復興事業で幹線道路として整備され、桜川沿いの道路も市電軌道があり、また隣接するこの区域の外（「中区火災保険図」高島方面）には鉄道が並行していた。

次にこの地域の耐火・準耐火建物についてみていこう（図2）。準耐火は「市街地建築物法施行規則」では次のように規定されていた。鉄骨造で外部を生子板張にしたもの、鉄骨造・木造で外部に石・煉瓦・人造石類を厚さ三寸



表2 「野毛山周辺」の主なコンクリート造建物

施設名	種類	住所	図番号
専売局（建築中）	コンクリート造	花咲町六丁目	No.11
戸部尋常高等小学校	コンクリート造	伊勢町二丁目	No.14
老松小学校	コンクリート造	老松町一丁目	No.18
本町小学校	コンクリート造	花咲町三丁目	No.20A
正金銀行客接待所	コンクリート造	宮崎町	No.20A
婦人会館	コンクリート造	宮崎町	No.20A
キリスト教会	コンクリート造	宮崎町	No.20A
横浜税務所	コンクリート造	野毛町三丁目	No.20B
石炭同業組合	コンクリート造	花咲町一丁目	No.21
聖アンデレ教会	コンクリート造	花咲町一丁目	No.21
震災記念館	コンクリート造	西戸部町字境久保	No.25
横浜図書館	コンクリート造	西戸部町字境久保	No.25
横浜市立東小学校	コンクリート造	南太田町字東耕地	No.34
中央職業紹介所	コンクリート造	桜木町一丁目	追加 A
横浜市電自動車車庫	コンクリート造	桜木町一丁目	追加 A
神奈川県農工銀行	コンクリート造	桜木町一丁目	追加 A
横浜市中央授産所	コンクリート造	桜木町一丁目	追加 A
神奈川モーター	コンクリート造	桜木町四丁目	追加 B
桜木会館	コンクリート造	桜木町六丁目	追加 C

注：「中区火災保険図」戸部方面から作成。  
記載は資料のまま。WC等は除いた。

以上か瓦張りでセメント・モルタル塗・コンクリート塗か厚さ一寸二分以上のセメント・モルタル塗・コンクリート塗かセメント・モルタル塗の上に化粧煉瓦を貼り合計一寸以上のもの、木骨土蔵造で塗土・漆喰等の厚さが三寸以上のもの、その他、地方長官が準ずると認めたものであった。

この地域には、耐火のコンクリート造二五・土蔵造一五・煉瓦造（と思われる）一、準耐火一九の計六〇の耐火・準耐火の建物があり、これらは東側の平地やそれに繋がる地域に偏っていた。コンクリート造のうち六棟は銭湯付属の建物、トイレ等の小型建物で、その他の一九棟は学校などの施設であった。この地域には小学校が五校あるが、老松小、本町小、戸部小、東小がコンクリート造の震災復興小学校で（範囲外

の西前小・西戸部小も同様）、一方で一本松小は修理して震災後も使われていた。その他、横浜市図書館、震災記念館、横浜中央授産所、婦人会館、中央職業紹介所、横浜税務署、専売局（建築中）の公的施設がコンクリート造であった。民間では石炭同業組合、神奈川モーター、神奈川県農工銀行などがあった（写真1）。

これらのコンクリート造の建物は、その耐火性から第二次世界大戦末期に震災後の木造仮庁舎のままであった横浜市役所などの移転先となった。老松小（老松国民学校、以下同じ）には市役所が入り、また東小と西戸部小は分庁舎としてそれぞれ一部の部署が入った。また震災記念館（当時、市民博物館）にも一部の部署が入り、図書館には市会が入った。市会は、後に市民博



写真1 神奈川県農工銀行と緑橋（前川謙三撮影・前川淨二家資料 帳票番号3113）



写真2 野毛山から宮川町方面 1929年、（前川謙三撮影・前川淨二家資料 帳票番号3098）  
注：手前に横浜憲兵隊の建物群が写っている。

物館に再移転する。このうち、分庁舎の東国民学校は、四五（昭和二〇）年五月二九日の空襲によって建物内が火災となり各部署の文書類を焼失している。その他、中央授産所には一九四二年に中区役所が入り、四四年設置の西区は暫く中区役所に同居したが、その後、「野毛山周辺」範囲外の「戸部方面追加D」にある花咲ビル（ジャパモーター株式会社）に移転している。

準耐火も公的・民間組織の施設が多く、中でも宮川町三丁目に憲兵隊本部ほか大小五棟がまとまっていた（写真2）。その他、煙草元売捌所や横浜興信銀行野毛支店、政友会横浜支部、日本メソジスト教会などが準耐火となっている。また個人宅でも数棟が確認できる。

ここでは、第一八号同様、火災保険図の特徴の一つである耐火建物を紹介

したが、「特別凡例」には火災報知機・消火栓といった防災関係の記号、空地や橋の材質・屋内通路といった火除地や避難に役立つ記号、一方で耐火性のない藁葺・板葺・杉皮葺や木橋の記号、ガソリンスタンドや火力を使用する銭湯や工場などの記号・記載があり、これらが火災保険額決定の基礎資料となっていた。

【参考文献】  
『横浜市区区域要覧（平成28年版）』（横浜市民局）二〇一六年、横浜市建築課『横浜市立復興小学校建築図集』（新建築社）一九三一年、『報告書 震災復興と大横浜の時代』（横浜市史資料室）二〇一五年、『地図』で探る横浜の鉄道』（横浜都市発展記念館）二〇一一年。  
（百瀬 敏夫）

# 一九三〇年代県立横浜第一高等女学校の卒業生と同窓生

はじめに

小学校卒業生女子の中等教育機関への進学率は、一九二五（大正一四）年に一四・一％、一九四〇（昭和一五）年に二二％、一九四五（昭和二〇）年には四三・六％まで上昇した（『日本の成長と教育―教育の展開と経済の発達―』文部省、一九六二年）。

この間一九三〇年代には、横浜でも女子の教育機会が拡大され、「職業婦人」の増加にもつながっていった。本稿ではその時期の女学生のうち、県立横浜第一高等女学校の卒業生と同窓生について見ていく。横浜における女子の教育機会拡大の背景には、早くからキリスト教主義の諸学校が設置され、女子教育に伝統があったこと、都市化にと

もない新中間層家庭の高等普通教育への教育要求が高まってきたこと、学歴が結婚の好条件と考えられるようになってきたこと、男子のように東京に遊学させる条件が女子には乏しかったこと、女性の社会進出を促進する条件が、横浜という貿易経済都市にあったことがある。また、生徒の量的な増加は、女子に対する中等教育の学習機会の拡大を意味すると同時に、「良妻賢母」といった伝統的な女子教育観に対する新たな展開をも意味した。家庭に入る者のためだけでなく、上級学校への進学

者、商業的実務の従事者といった進路を選択する生徒のために、具体的な配慮がなされるようになっていった（『横浜市史Ⅱ』第一巻上）。

## 神奈川県立横浜第一高等女学校

横浜では、キリスト教主義の女学校により女子教育が始まり、文部省が認定する高等女学校としては、私立横浜高等女学校や私立神奈川高等女学校などが役割を担ってきた。神奈川県立横浜第一高等女学校（以下、県立第一高女と記載）は、神奈川県内で最初の県立女学校であり、県内でも上級学校への進学率が高かった。

前身の神奈川県高等女学校は、一九〇〇（明治三三）年に文部省より設置が認可され、開校した。翌年五月より横浜市岡野町（現在、西区岡野）で授業を開始、神奈川県立高等女学校と改称した。一年目は募集定員に達せず、無試験で全員合格。二年目からは入学が難しくなり、「明治四〇年代になると、第一希望は『県立』、これに落ちるとお手伝いさん付きで東京・虎の門の女学校（東京女学館）に入るのが横浜の上流階級の子女のコースとなった」という（『創立百周年記念誌《学校編》』神奈川県立横浜平沼高等学校創立百周年記念行事校内実行委員会、二〇〇〇年）。「良妻賢母」を育てるという堅実な教育方針が父母に受け入れられ、また、必修科目として英語教育を重視したことも評価された。一九〇七（明治

四〇）年から神奈川県女子師範学校を併置し、一九二七（昭和二）年に分離。一九三〇（昭和五）年から神奈川県立横浜第一高等女学校と改称。

戦後は、一九四八（昭和二三）年新制高校となり、神奈川県立横浜第一女子高等学校と変更。一九五〇（昭和二五）年に男女共学となり、神奈川県立横浜平沼高等学校にいたる。

## 卒業生の進路

それでは、昭和戦前・戦中期の高等女学校卒業生のうち、神奈川県全体と県立第一高女卒業生の進路を見ていきたい。

表1・表2は、前年度高等女学校卒業生の進路のうち①進学・②就職・③その他の人数、割合を示したものである。表1は神奈川県全体、表2は県立第一高女のものである。それぞれ、一九三〇（昭和五）年と、①進学や②就職が大きく増加した一九三四（昭和九）年と一九三七（昭和一二）年の数字を示した。県全体では、次第に①進学や②就職が増えるものの、③その他、①進学、②就職の順に多くなっているが、県立第一高女では一九三七（昭和一二）年には①進学、②就職、③その他の順序となる。

表3には、一九三一（昭和七）年三月の卒業生の、具体的な進路を示す。家庭に居るもの（二〇二名）、上級学校入学者（四八名）、就職者（六名）である。進学先は、教員や医療関係を目指すものなど職業に結びつくものと、裁縫

表1：神奈川県前年度卒業生進路

	①進学	②就職	③その他	計
1930年	296 (20.4%)	85 (5.8%)	1,073 (73.8%)	1,454
1934年	432 (23.5%)	274 (14.9%)	1,133 (61.6%)	1,839
1937年	627 (23.9%)	546 (20.8%)	1,454 (55.3%)	2,627

人数（人）及び全体の割合（％）。「前年度卒業生状況ニ関スル調」（『全国高等女学校実科高等女学校ニ関する諸調』文部省普通学務局）各年度より作成。

表2：県立横浜第一高等女学校本科前年度卒業生進路

	①進学	②就職	③その他	計
1930年	49 (37.4%)	21 (16%)	61 (46.6%)	131
1934年	88 (51.8%)	30 (17.6%)	52 (30.6%)	170
1937年	95 (49.7%)	53 (27.7%)	43 (22.5%)	191

人数（人）及び全体の割合（％）。表1と同様に作成。

などの学校が多かった。就職希望者は四十数名いたが、就職難のため就職者は六名となっているという（『校友会時報』第三号『花橋樹』第四一号 神奈川県立横浜第一高等女学校校友会、一九三二年）。就職者は一九三三（昭和八）年に一三名、一九三四（昭和九）年には不況を脱したためか、三〇名に増加した。この頃県立第一高女では、卒業生の進路についてどのように考えていたのだろうか。同校教員が語った、校友会誌の記事を紹介する。一九三三（昭和八）年に同校雑誌部の主催で、校長・



表3：1932（昭和7）年卒業生進路

	進学先・就職先	人数
家庭に居る者		102
	第六臨時教員養成所（東京女子高等師範学校併置）	1
上級学校入学者	東京女子高等師範学校附属高等学校専攻科	1
	東京音楽学校	1
	神奈川県女子師範学校本科第二部	5
	東京府立第一高等学校高等科	2
	横浜市立女子専修学校高等科	8
	日本女子大学家政科	2
	実践女学校専門部国文科	1
	同家政科	1
	共立女子専門学校	2
	帝国女子医学専門学校	2
	帝国女子薬学専門学校	6
	女子英学塾	1
	女子美術学校	1
	自由学園高等科	1
	戸板裁縫女学校	7
	東京家政学院	3
	双葉高等女学校高等科	1
	フェリス女学校高等科	1
	神戸女学院音楽部	1
	計	48
就職者	東京鉄道局	1
	商工省絹業試験場	1
	第一生命保険相互会社	2
	日本生糸株式会社	1
	株式会社大林組	1
	計	6
合 計		156

『花橘樹』第41号（神奈川県立横浜第一高等女学校校友会、1932年）より。前掲「前年度卒業生状況ニ関スル調」（文部省普通学務局）では、家庭に居る者を含む「その他」が106人になっている。

教員たちの考える卒業生の進路は、①上級学校に進む場合には、しっかりと目的を持つ。②就職する場合も結婚までの時間つぶしではなく、慎重に考えて適職を選ぶということであろうか。そして、③家庭の良い主婦になるにも、さらなる修養が必要とされていた。そのため、第一高女同窓会「真澄会」では、一九三三（昭和八）年四月に、本科卒業後に進学するための専攻部を設けた。以後、上級学校進学者が増え、そのほぼ半数が専攻部に通うようになった。

顔や姿は二の次で……」。

K「男の立場から望むならば、先づ第一に貞操と経済観念を確立して凡ての修養をやつて欲しいと思います。第二に味気のない理くつより情味ある経験を積んで来て欲しいと思います。栄養価の講釈を聞かされるよりは、美味しい味噌汁と漬物を食べさせて貰った方が嬉しいですからね。尚欲を云へば朗かで淡白であつて欲しいですな……。

F「家庭をもつと科学的にきりまわしていた、きたひと思ひます」。

S「第一に時間を生かして使つていた、きたひと思ひます」。「それから女性の特質としまして朗かであつてほしいと思ひます」。

③家庭に入る卒業生に向けて



図1 真澄会館で開催されたクラス会（本科14回）  
『真澄会誌』第27号（1931年）

『真澄会誌』と同窓生

県立第一高女同窓会「真澄会」は、親睦を図るために同窓会誌を発行した。横浜市史資料室では、次の会誌を所蔵している。

『神奈川県立高等女学校同窓会誌』第一五号（一九一八年）―第二六号（一九二九年）、『真澄会誌』第二七号（一九三二年）―第三五号（一九三九年）。ただし、第三二号は欠号である。

このうち、『真澄会誌』と改題した後同誌について見ていく。第二七号の内容は、口絵・定款・校長の交代による新旧校長の挨拶・穂積重遠「婦人による社会の浄化」・相澤英次郎「昭和五年七月茶道講習会の席上にて」・本会記事・支部会だより・母校だより・消息・御結婚・御死亡・会員名簿である。特に一二頁にわたる総会・行事・クラス



図2 戦捷祈願旅行 (榛名神社参拝)  
『真澄会誌』第34号 (1938年)

会の口絵写真と、本会記事に注目したい。  
口絵には、文化刺繍講習会と五月二五  
日に開港記念横浜会館で開いた「真澄  
演奏会」の写真を掲載している。「各地  
ノ集ヒ」には、東京、仙台と朝鮮、大  
連の同窓会写真を載せている。ほかに  
も「外地」を含め、いくつか支部があっ  
た。クラス会の写真も複数載せている。

なかには、一九二九 (昭和四) 年に、  
母校敷地内に完成した真澄会館で開催  
されたクラス会のものもある (図1)。

そして、「真澄会」の事業部として、  
①講演部・②手芸部 (裁縫、刺繍、編  
物等の講義及び実習)・③家事部 (料理、  
洗濯、美容等の講義及び実習)・④茶華  
道部・⑤見学部 (工場その他の視察)・  
⑥旅行部 (日帰り及び宿泊の短期旅行)  
を設けて、事業への参加希望申し込み  
を募っている。卒業後も様々な修養の  
機会を設け、会員に提供しようという  
ことである。この雑誌には、一〇月の  
行事について案内のチラシが挟まっ  
ている。明治製菓会社と照明学校の見  
学及び、永井潜 (医学者) の講演会の

ものである。

第三五号までの口  
絵を見ると、クラス  
会は真澄会館のほ  
か、野澤屋、森永キ  
ャーデイスストア、不  
二家などで開催され  
ている。卒業したば  
かりの同窓生には進  
学先の制服や洋装が  
見られるが、数年後の同学年の女性た  
ちは、家庭に入ったためだろうか、ほ  
ぼ和服を着ているのが見受けられる。

一九三七 (昭和一二) 年七月に日中  
戦争が勃発すると、見学会や旅行の写  
真には、次第に戦争の影響が感じられ  
るようになる。第三四号 (一九三八年)  
には「戦捷祈願旅行」として、榛名神  
社を訪れた記念写真を掲載している (図  
2)。このような旅行については、注意  
を喚起する記事も見られた。例えば、  
第三五号のクラス会記事には、「戦捷祈  
願旅行とか、将兵慰問等を物見遊山的  
(少々云ひすぎかも知れませんが) に考  
えてる人がたま／＼あるのぢやないで  
せうか。是等の事は戦時道徳を最も冒  
瀆するものです」という意見が述べら  
れている。

### 同窓生の廣瀬家四姉妹

戦中・戦後の時期を、県立第一高女と  
ともに過ごした家族がいる。廣瀬家  
は、母 (二一回卒) と娘四人が第一高  
女卒業生であった。姉妹は、一九三八 (昭

和二三) 年から一九五三 (昭和二八) 年  
まで、それぞれの学生時代をおくった。

長女尾崎泰子 (四〇回卒) が、『創  
立百周年記念誌《真澄会編》』に寄せ  
た文章がある。それによれば、泰子は  
一九三八 (昭和一三) 年四月に入学し、  
一九四三 (昭和一八) 年三月に卒業した。  
在学中五年間の後半は、戦争の影響を  
受けた。敵国語となった英語の授業は  
希望者のみとなり、修学旅行も四年の  
日光旅行は中止に、五年の関西旅行に  
はやと行くことができた。勤労奉仕  
もあり、鶴見の森永製菓 (図3)、長津  
田の火薬庫 (陸軍兵器補給廠)、桜木町  
の三菱ドック (現在、みなとみらい地区)  
などで作業をした。卒業後は、中学校  
制度改革により置かれた専攻科に一年  
在学した。

次女宣子 (四三回卒) は、一九四二 (昭  
和一七) 年四月に入学。入試は内申と  
面接のみであった。一クラス五〇名で、  
六クラスあった。二年から英語が選択  
になり、七〇名ほどが英語クラス、ほ  
かの学生はその時間に家庭科を学んだ。  
工場動員が始まり、最初は鶴見の食品  
工場に行き、次に川崎のブラウン管工  
場で作業をした。一九四五 (昭和二〇)  
年五月、横浜大空襲で家が全焼した。  
終戦後の一九四六 (昭和二一) 年三月、  
四年で卒業するか五年に進級するかを  
選択できることになり、卒業して東京  
女子大学に進学した。

三女光江 (四八回卒) は、一九四五 (昭  
和二〇) 年四月に入学したが、まとも



図3 森永食糧工場で働く女学生たち

横浜市史資料所蔵 横浜の空襲と戦災 神奈川県立横浜平沼高等学校資料

に授業を受けたのはほんの数日であっ  
た。五月の横浜大空襲の後平塚市に移  
り、平塚高等女学校に転校。戦後三学  
期から県立第一高女に復学し、横浜ま  
で約五年間通った。学校改革の時期で、  
三年の三月に県立第一高女併設中学校  
を卒業し、新制の横浜第一女子高等学  
校の一年となった。三年の年に、一年  
は男女共学となり、校名も横浜平沼高  
等学校となった。

四女絹子 (五〇回卒) は、その年、  
一九五〇 (昭和二五) 年四月に、横浜  
平沼高等学校に入学し、男女共学一期  
生となった。

泰子の娘である伏谷道子氏によると、  
戦前、泰子の父親が平塚市内に転勤す  
るのに伴い、母親と三女・四女が平塚  
市に引越し、県立第一高女に通う次女  
と祖父母とともに、泰子が横浜に残っ  
た。しかし、一九四五 (昭和二〇) 年



五月、横浜大空襲で被災後、平塚市に家族全員で暮らすようになったという。

## 尾崎泰子旧蔵資料から

泰子（旧姓廣瀬、一九二六年三月生）は、「横浜大空襲で家は全焼、卒業証書や思い出の写真などもすべて失ってしまった」と書いているが、横浜市史料室には、伏谷氏より資料をご寄贈いただいている。当時防空壕に入れてあったため、焼けずに済んだのかも知れないということである。資料は、一九三九（昭和一四）年から一九五六（昭和三一）年までの、主に泰子の県立第一高女在学中から終戦後のもの、三〇件である。戦中・戦後を過ごした女学生の資料として、貴重である。次に紹介したい。

### ①稽古事

泰子は、県立第一高女本科在学中からいくつかの稽古事をしていった。資料には、茶道（裏千家）、煎茶式（東阿部流）、宮城社箏曲の複数の免許状が含まれている。特に茶道は戦後も続いていたことがわかる。昭和初期において、女学生の琴、茶道、生花などの稽古事は、いざというときに自立するための職業としての実用と、教養を兼ねたものであったという。

### ②専攻科・タイピスト養成所

また、本科課程卒業後は専攻科に進み、一九四四（昭和一九）年三月に修了した。その間同年一月には、大日本婦人会横浜市支部タイピスト養成所本科を卒業した。一九四二（昭和一七）

年に発足した大日本婦人会は、未婚者をのぞく二〇歳以上の全ての女性を会員として、国家総力戦体制に動員することを目指した。女性の訓練や教育に力を入れており、タイピストの養成も実施したのだろう。それらの修了証書がある。

### ③幼児教育

専攻科終了後、一九四五（昭和二〇）年三月に、横浜聖徳保姆養成所本科課程修了証書を取得した。同養成所（現在の聖ヶ丘保育専門学校）は、一九三四（昭和九）年に、仏教主義の保育者養成所として鹿野久恒が中区長者町に創設したもので、翌年度の認可を得た。本科の修業年限は一年であった。泰子は、同養成所終了後、神奈川県幼稚園保姆免許状を取得している。これらの証書も残されている。

伏谷氏によれば、平塚市の廣瀬家の

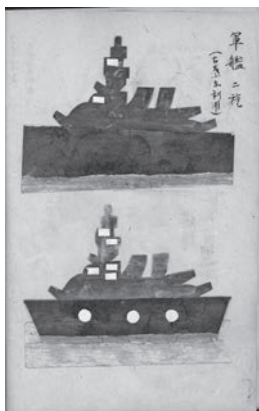


図4 「手技日誌」から 横浜市史料室所蔵 伏谷道子家資料  
古葉書を使った、軍艦と朝顔である。

近くに父親の務める会社の社宅があり、幼稚園保姆免許状を持つ泰子は、幼稚園というきちんとしたものではないが、社宅の一部屋を借りて、社員の子どもたちを集めていたそうである。その時に次のような教材や、紙芝居を使用したと思われる。

### ○「手技日誌」

幼稚園の年度に合わせて、四月から三月までの年中行事などをテーマに、紙で作った教材を貼りこんだ綴りである（図4）。材料には、折り紙や千代紙、古葉書、竹ひごなどが使われている。こいのぼりや七夕まつり、お月見、ひな祭りなどの行事の合間に、軍艦や飛行機などが貼られ、戦争の影響が見られる。

### ○「紙芝居」

一九四四（昭和一九）年から一九四六（昭和二一）年までに作成されたもので、描き写したものと印刷物がある。高橋五山作「幼稚園紙芝居第二輯 スズメノオヤド・オニノツリハシ」や、「同二三輯 ネズミノヨメイリ」などは一九四三（昭和一八）年に発行されたものだが、一九四五（昭和二〇）年と一九四六（昭和二一）年に描き写している。印刷さ



図5 泰子と友人たち（1946年3月の同窓会にて）  
横浜市史料室所蔵 伏谷道子家資料

れたものは「日本教育紙芝居協会作品アカイマリ」・「同コネコチャントトンボ」（日本教育画劇、一九四四年）や、サトウハチロー作「ボクチャント卵」（日本画劇、一九四六年）などである。戦時期には、国策を宣伝する紙芝居が作られていたが、これらにはその影響はほとんど見られない。

### ④写真類

泰子の女学校時代に写された、遠足などの記念写真が残されている。図5は、戦後の一九四六（昭和二一）年三月、同窓会の際に撮影されたと思われる。和服の一人を除いて、洋服の上着にもんぺ姿のようである。後列左端が泰子で、この頃子どもたちに手作りの紙芝居を見せていたのだろう。泰子は、翌一九四七（昭和二二）年五月に結婚して家庭に入るが、その婚礼写真もご寄贈いただいた。

### おわりに

この稿では、昭和戦中と戦後間もないころの、県立第一高女卒業生と同窓生について見てきた。戦争による影響についても、考慮する必要があるが、一般に進学、就職、家事手伝いの後、結婚して家庭に入る女性が多く、進学率の高い県立第一高女の卒業生も同様であった。

伏谷道子氏には、資料のご寄贈及びご教示をいただきました。感謝いたします。  
（上田 由美）

## 大正・昭和はじめの地図の旅 ～安室吉弥家資料より

横浜市史資料室で所蔵する安室吉弥家資料（磯子区）は、大正から昭和戦前期に旧・久良岐郡および横浜市において小学校の教員を務めた安室晋治に関する資料群である。本資料群は目録が『横浜市史資料所在目録―近・現代―第九集』（二〇〇〇年）において公開されている。

安室晋治は一八九二（明治二五）年に生まれた。教員になり、一九二一（大正一〇）年に日下小学校（当時は久良岐郡）の校長に就いた後、一九四二（昭和一七）年に退職するまでいくつかの小学校等の校長を歴任した。本資料群は安室の赴任校における教育実践の記録、教科書や副読本、参考図書などから成り、退職後に関わった青年団や町内会などの資料も含まれる。

資料目録は文書類と刊行物類に二分され、後者はさらに「横浜市関係（学校／その他）」「神奈川県関係（学校／その他）」「絵葉書」「その他」に分けられている。そこには、安室が教材として使用したのであるうか、あるいは修学旅行や校外学習などの際に入手したのであるうか、全国各地の地形図や観光案内（イラストマップ）の類が多数含まれる。「地図」を「ある地域の地理情報を表現した図版」と定義するならば、それらはいずれも地図資料である。目録では「横浜市関係」と「神奈川

県関係」においては、地図の一点ごとの題名が記載されているが、「その他」においてはほとんどが「観光地図一括」や「観光案内〇〇」（〇〇は地名）、「東京付近観光案内一括」や「千葉県地図一括」などのかたちで記載されている。これら一括された資料からも地図に該当するものを一点ずつ抽出していくと、総計で三六一点の地図資料が安室家資料には含まれている。

では、これらの地図資料を分類してみよう。地図の分類には、（一）作成者、（二）対象地域、（三）縮尺、（四）作成時期、（五）表現内容・手法、などの基準が考えられる。（一）は国家や地方公共団体などの公的機関か、民間団体や個人などか、（二）は世界や国土の全体か、あるいは府県の全体や一部か、都市や観光地などの特定の土地か、（三）は大縮尺の詳細図か、小縮尺の広域図か、ということである。（四）はその通りであり、（五）は多岐にわたるが、一般図か主題図（テーマ図）か、平面図か立体図か、あるいは航空写真か、などということである。

分類の設定はさまざまなものが考えられるが、例えば今回は特に（一）と（二）に依拠しながら、【Ⅰ】から【Ⅴ】の分類項目を設定した（【Ⅱ】から【Ⅳ】はさらに細目を設定）。それぞれの点数は下記のようになる。なお、作成年代は大正期の一九一〇年代から昭和戦前期の三〇年代までが中心で、一部に明治後期や昭和の戦後すぐのものも含まれる。また、【Ⅱ】から【Ⅳ】には、一般

的な平面図から鳥瞰図（パノラマ地図）などの立体図の類までが混在している。

\*\*\*

【Ⅰ】官製地形図：五六点

【Ⅱ】横浜地図Ⅱ①市内全図：一七点／②市内各地：一一点

【Ⅲ】神奈川県地図Ⅱ①県内全図：九点／②県内各地（横浜を除く）：四〇点

【Ⅳ】日本地図Ⅱ①国内全図：一三点／②国内各地「北海道・東北地方」：四点／③国内各地「関東地方（横浜市・神奈川県を除く）」：六三点（うち千葉県：一〇点、旧東京府・市：二五点）／④国内各地「中部地方」：六一点（うち山梨県：一三点、静岡県：一九点、愛知県：一五点）／⑤国内各地「近畿地方」：一七点／⑥国内各地「中国・四国・九州地方」：二二点

【Ⅴ】海外地図：四九点（うち旧満州：一六點）



安室家資料には官製地形図を除くと、横浜の地図は比較的少ないが、神奈川県や国内の各地の地図が多数含まれている。旧東京府・市はもちろん、とりわけ千葉県や山梨県、静岡県、愛知県など、関東から中部地方が多い。

そこで本稿では、八点に限られるが、特に稀少と思われるものを選んで紹介したいと思う。全体図もしくは部分拡大図をキャプションとともに掲載するので、地図の旅をお楽しみいただきたい。もっとも、図の選定や配列に何らかの脈絡があれば最善なのだが、残念ながらそれは見出せなかった。

とはいえ、横浜周辺以外の地図が当室の事業で活用される機会は少ないと思われるので、このような紙面を残しておくことも無意味ではあるまい。ただし、原図が大判の多色刷りであるため、図版の判読が難しくなってしまうことをお許しいただきたい。

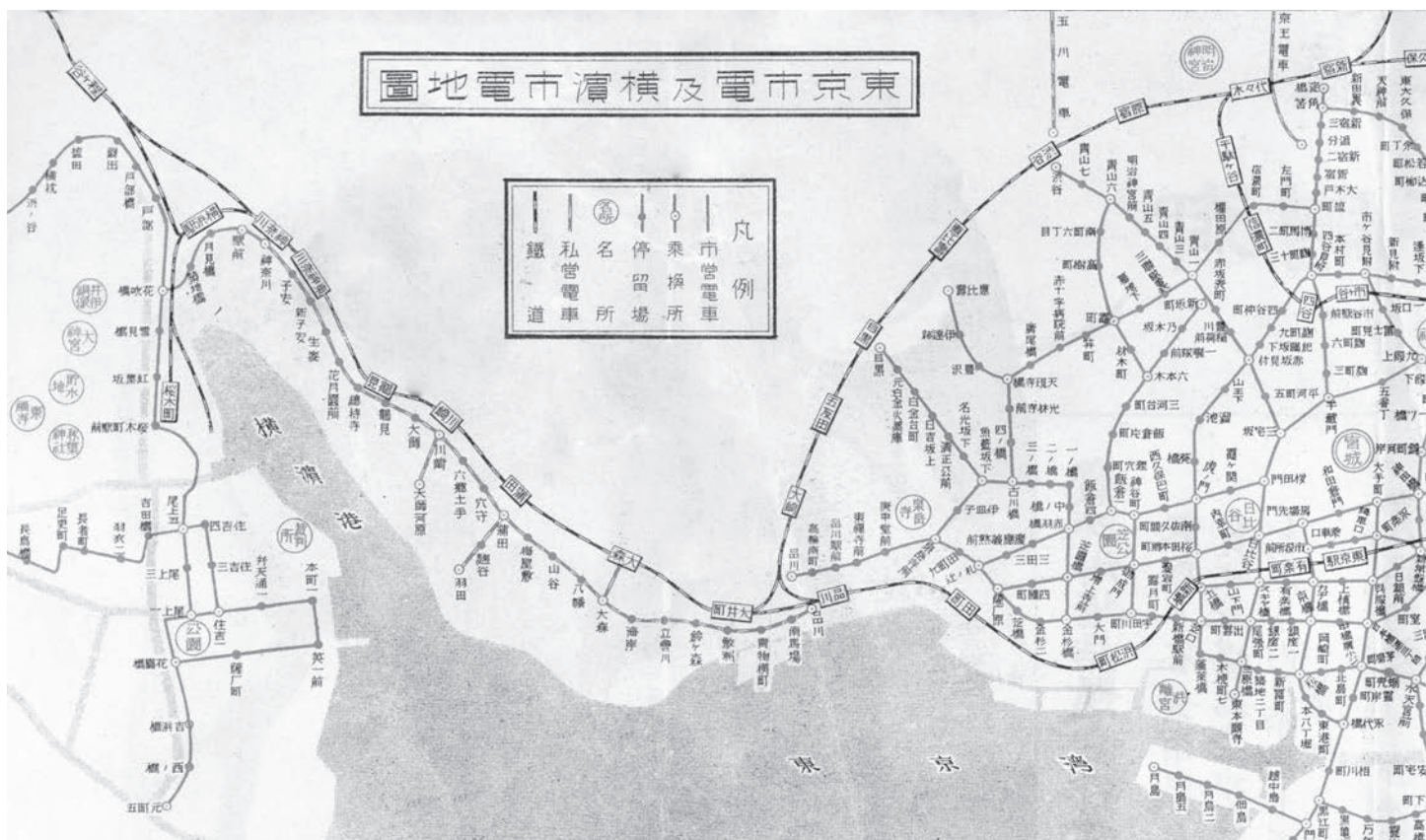
（岡田 直）





【図1】「横浜市内小学校位置図」(部分)

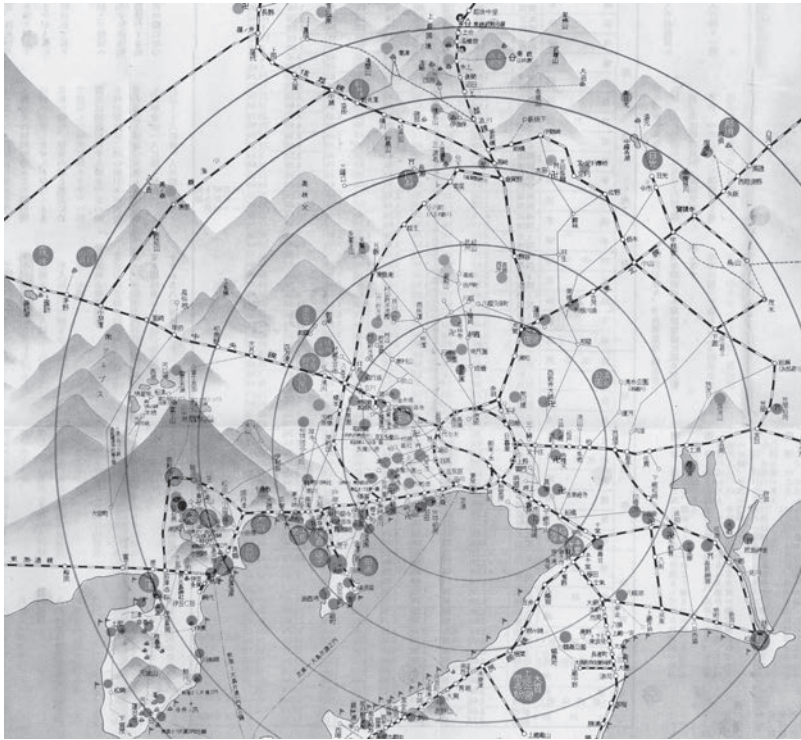
1937(昭和12)年、横浜市教育課発行【資料番号255-7】/横浜市立学校の位置図(分布図)は戦前から戦後を通じて適宜発行されているが、本図が最初のものである。安室が最初に校長に就任した日下小学校(図中の23。矢印を加筆)は、この時すでに横浜地域の拡張によって市立学校になっている。



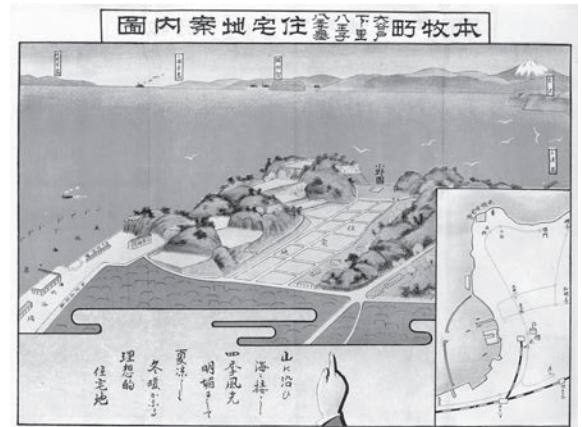
【図2】「東京市電及横浜市電地図」

1925(大正14)年頃、宝酒造株式会社発行【資料番号1716「(東京市電及横浜市電地図ほか)」より】/裏面は発行者である製造業者の宣伝が印刷されている。直通運転をする計画があった東京・横浜の市内路面電車(市電)と、京浜間の郊外電車(京浜電気鉄道)が一枚に表現された珍しい路線図。

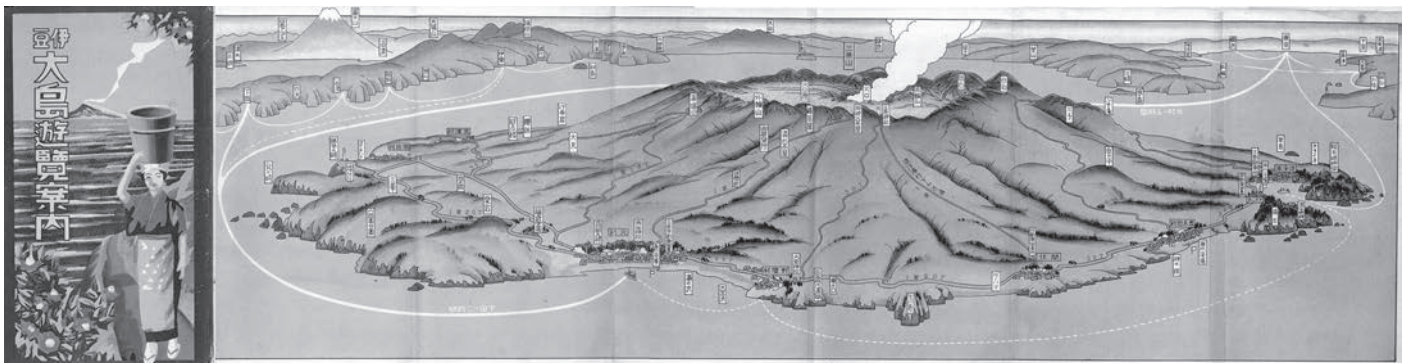




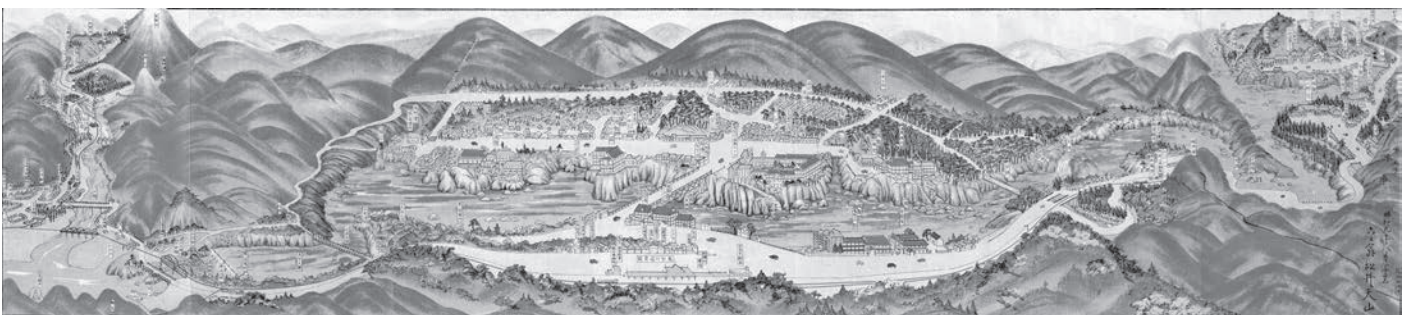
【図4】『海辺林間行 小学生の割引』付図  
1935（昭和10）年頃、東京鉄道局発行【資料番号1732「（観光案内1東京近傍）」より】  
／鉄道省が発行した印刷物の付図で、「●印は夏季小学生の特別割引地」とある。「児童  
の健康増進策の一助として」（本文）、海水浴場や高原・林間の遊覧地の最寄り駅まで割  
引が適用された。



【図3】「本牧町大谷戸・下里・八王子・八王子壱住宅地案内図」  
1929（昭和4）年頃【資料番号255-17】／自然の海岸だっ  
た本牧半島に「理想的」な住宅地として分譲された本牧住宅地  
の案内。「小野園」は横浜商人の小野家の邸宅で、一帯はその  
所有地。中区本牧町の大谷戸と下里はやがて本牧大里町となる。

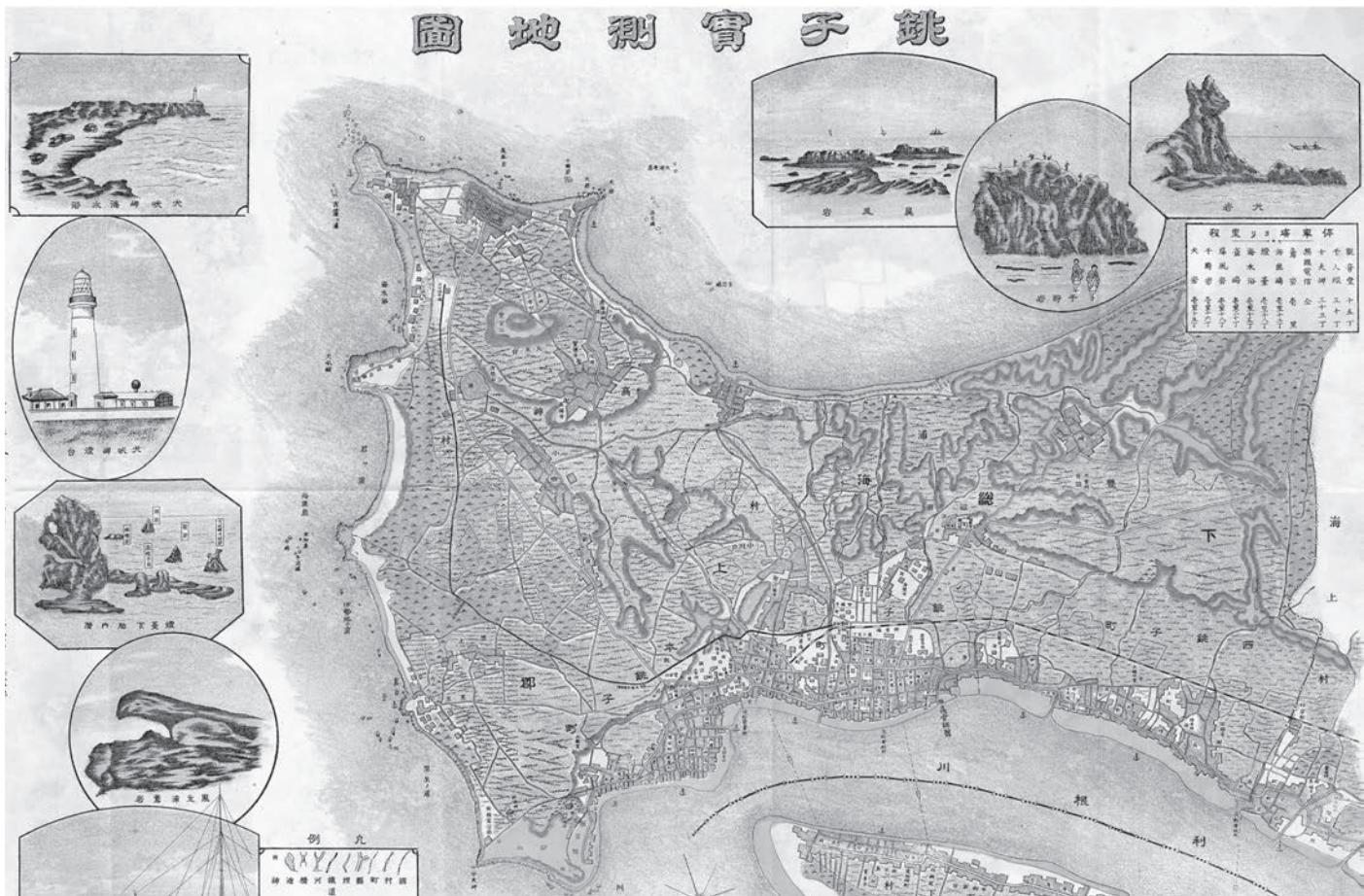


【図5】「伊豆大島遊覧案内」  
1930（昭和5）年、柳瀬善之助作、島の新聞社発行【資料番号1732「（観光案内1東京近傍）」より】／火山の三原山を擁する大島は古代より伊豆国に属し、  
近代にいったん静岡県に含まれたが、すぐに東京府（都）に編入された。下田や東京から定期航路が設定され、この頃より観光地化が進んだ。

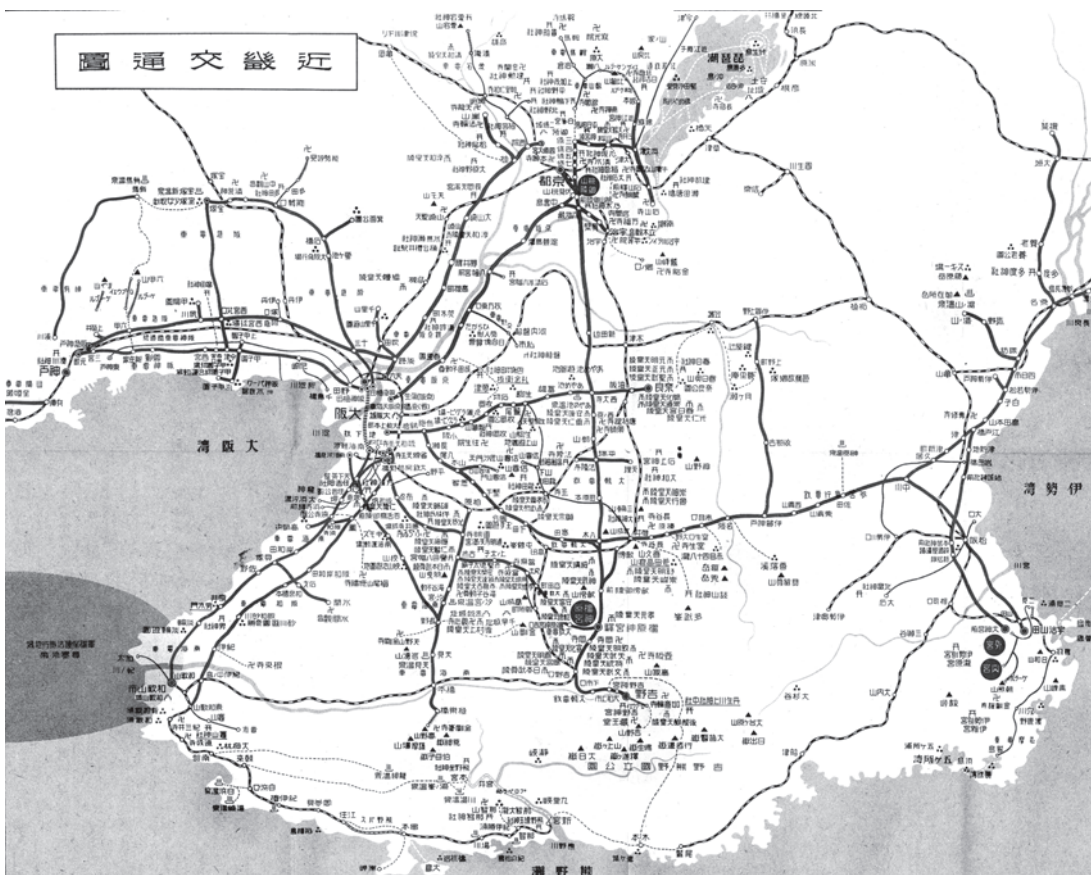


【図6】「天下之絶景 鬼怒川溪谷温泉鳥瞰」  
1934（昭和9）年、松井哲太郎（天山）作・発行【資料番号1748「（観光案内22房州ほか）」より】／松井天山は千葉県を中心に関東の都市や観光地  
を描いた鳥瞰図絵師。栃木県の鬼怒川温泉は昭和初期にその名が付けられ、現在の東武鉄道の駅名にも採用されたことで、関東有数の温泉地に発展した。





【図7】「銚子実測地圖」  
1915（大正4）年頃、今井金三郎発行【資料番号1720「千葉県地図一括」】より／千葉県の銚子は犬吠埼の脇の利根川河口に位置する漁港都市。  
大正時代、飯沼観音を中心とする本銚子町と、水産工場が集まり銚子駅を有する銚子町に分かれ、銚子電鉄の前身の銚子遊覧鉄道（銚子～犬吠駅）が開通した。



【図8】「近畿交通圖」  
1940（昭和15）年【資料番号1746「観光案内20伊勢ほか」】より／発行者不明。近畿地方にある社寺や史跡、御陵などをめぐるために作成された「参拝の葉」の裏面。戦時下だが、特に私鉄沿線の遊園地や野球場、温泉なども詳しく記されている。



## 所蔵資料紹介

## 『昭和の中村』第六号

『昭和の中村』は縦三〇五、横四五三ミリメートルを二つ折りにした四ページの刊行物である。発行所は昭和の中村社（中村町一二二九）、編集印刷兼発行人は黒岩久志とある。表題には「中村町発展機関紙」とあり、当時の中区中村町についての逐次刊行物である。

市史資料室には、この一九三〇（昭和五）年一月一日発行の第六号のみの所蔵で（市史資料室資料一二三八）、これ以前に発行されたであろう第一号（第五号、これ以降に何号まで発行されたのか）は判明しない。また、この号は発行人の事情や新年号の準備のために減ページとなっており、「新年号は予告通りの十二頁以上」と書かれている（「御詫び」、「編集室」）。

発行人の黒岩久志は、昭和の中村社がある中村町一二二九の黒岩印刷所を経営（『職業別電話名簿』第二二版、日本商工通信社、一九三二年）している。黒岩印刷所は掲載広告では名刺や年賀



『昭和の中村』第6号 1930年12月

## 『昭和の中村』第6号（1930年12月1日発行）記事一覧

頁	筆 者	表 題
1	七浦 昭和の中村社救済部	三時代の中村 中村町貧困者救済金募集 通信（隣保館の十銭床屋／石橋理髪店の奮闘／西で聯合売出し） 中村町出身者消息〔松田兼吉氏／萩原房太郎氏／宮本健治氏〕 新年号の広告募集
2	N・タカマル	成田山詣と義民宗吾の跡を旧家に訪ふ 御詫び〔新年増刊号準備のため本号減ページ〕
3	係り	ニュースと雑評 瑕随聞駄話〔アラズイブンダワ〕 中村町の名誉!! シャムへ行く 我等の健児坂上末好君
4	如是丘人 黒岩	随想 探偵趣味放談【二】 編集室

状や広告などを請け負っていた。

この第六号の内容は右の記事一覧の通りで、「三時代の中村」をはじめ地域の話題が主である。この他に二〜四ページには、酒類問屋打木屋本店や豚肉問屋松原彌平商店などの町内の広告が掲載されている。一ページの表題下には、広告料は「五十銭、一円、一円半、二円以上実費掲載」となっている。

また「編集室」には、「福井氏の玉稿や写真も新年号に廻します」とあり、写真掲載もあったようである。

（百瀬 敏夫）

## 《市史資料室たより》

## 【令和6年度横浜市史資料室室内展示】

## ◆所蔵資料紹介「中区火災保険図」

会 期：開催中～3月22日（土）

時 間：午前9時30分～午後5時

◎入場無料

会 場：横浜市西区老松町1番地  
横浜市中央図書館地下1階  
横浜市史資料室室内

火災保険率算定の基礎資料であった大縮尺地図、当室所蔵「昭和初期「中区火災保険図」を紹介しします。

## 【令和6年度講演会が終了しました】

9月28日（土）午後2時より横浜市中心図書館地下1階ホールで「野毛界限彫刻巡礼ー清正公と井伊直弼と美空ひばり」を開催し、79人にご参加いただきました。

アンケートから「彫像について周りの物、風景、所在地といった複数の視点から解説をされて彫像のイメージの変遷、その現状など深く知ることができた」、「野毛周りの彫刻を時間と場所をこえて巡礼できた」、「何気なく見過ごしていた銅像にたくさんの歴史があり、その面白さを教えていただいた」、「銅像の見方が変わった」、「ストリートウォッチングがゆっくり楽しめそう」等、木下直之先生の講演から刺激を受け、彫刻を見るために街歩

きにでかけたいという感想を多くいただきました。この講演会の内容は、横浜市史資料室紀要第15号（来年3月発行）に掲載予定です。



9/28 講演会の様子

## 【寄贈資料】

1 富浜 利郎様 富浜利郎家資料追加	10件
2 水橋 佑介様 表彰状（昭和20年5月8日）	1件
3 株式会社CLS様 池田家資料	111件
4 澁谷 吉彦様 ボンゲー洋装店資料追加	32件
5 木村 恵子様 永田家資料	16件

## 6 松澤美津子様

松澤家資料

4件

## 【横浜市史資料室のご利用について】

横浜市史資料室は、取り寄せが必要な資料が多いため「事前予約の方優先」によるサービスの利用を案内しております。事前に電話、eメール等でご利用方法等をご相談ください。

予約なしで来室された場合、閲覧を希望される資料によっては、取り寄せの関係から別日にご案内する場合がありますのでご了承ください。ご不便をおかけしますが、ご理解・ご協力のほどよろしくお願いいたします。

## 【資料提供のお願い】

当資料室では昭和期の横浜に関する国内外の資料の収集・保存・調査研究および公開を行っています。昔の街並みや行事の写真、古い絵はがき、パンフレット、ポスターなど横浜を記録した資料をお持ちの方はぜひご連絡ください。次世代の市民に引き継ぎます。

## ◇休室日のご案内◇

毎週日曜日及び横浜市中心図書館休館日